

## 前近代ベトナムにおける聖職者養成のための現地教育 —パリ外国宣教会西トンキン代牧区のコレージュとセミナー—

牧野元紀

### はじめに

日本を含めた東アジアの近世末期から近代にかけてカトリック布教を先導したのは「パリ外国宣教会 Société des Missions Etrangères de Paris (MEP)」である。イエズス会をはじめとする修道会系の他の宣教団体とは異なり、在俗司祭からなる同会の活動の主要な目的の一つは布教先における現地人聖職者の養成である。

MEP が海外布教を展開する 17 世紀後半から 19 世紀にかけてのアジア各地においては、司教区を未だ確立しえないゆえの暫定措置として、「代牧区（使徒座代理区）Vicariat Apostlique」が設けられた。教皇庁の許可を得て、MEP にはその多くの管理が委ねられていた。各代牧区ではトップに代牧司教 Vicaire Apostolique が君臨し、その指導下に複数のヨーロッパ人宣教師が多岐に渡る職務を担った。現地人聖職者の養成機関であるコレージュ Collège とセミナー Séminaire の運営もその一つである。

当時、MEP が管轄した代牧区のうち、20~30 万人の信者を有していたことからアジア最大の規模を持つと目されていたのがベトナム北部の西半分を占めた「西トンキン代牧区 Vicariat Apostolique du Tonkin Occidental」である。

本稿ではこの西トンキン代牧区において現地人聖職者の養成の舞台であったコレージュとセミナーに関して、主にパリの MEP 文書館に所蔵される宣教師書簡から得られた情報をもとに紹介したい<sup>1</sup>。具体的には、西トンキン代牧区においてコレージュとセミナーが歴史的にいかなる変遷を遂げ、どのような教育が実践されていたのかを明らかにしたい。そして、MEP が当地での聖職者養成をことさら重視した理由について若干の考察をめぐらすことしたい。

### 1. パリ外国宣教会における現地人聖職者養成のための現地教育機関の位置づけ

西トンキン代牧区をはじめとする MEP の各代牧区では、聖職者を目指す学生はコレージュにおいてラテン語の学習を中心とした基礎教育を受け、そのうち優秀で適性を持つとヨーロッパ人宣教師もしくは現地人司祭によって推挙された者がセミナーに進学して神学を学んだ。最終目標は教区付司祭に就任することである。コレージュは比較的規模の大きな「クレティアンテ chrétienté (信者の居住する集落)」のいくつかに設置された<sup>2</sup>。歴代の代

<sup>1</sup> パリ外国宣教会所蔵文書 Archives des Missions Etrangères de Paris (AME)。以降は巻数と頁数で示す。

<sup>2</sup> 西トンキン代牧区のクレティアンテについて詳細は、牧野元紀「ベトナム前近代史のなかのカトリック：信仰生活共同体クレティアンテと信者のくらし」(『上智大学キリスト教文化研究所紀要』28 号、上智大学キリスト教文化研究所、2010 年) を参照のこと。

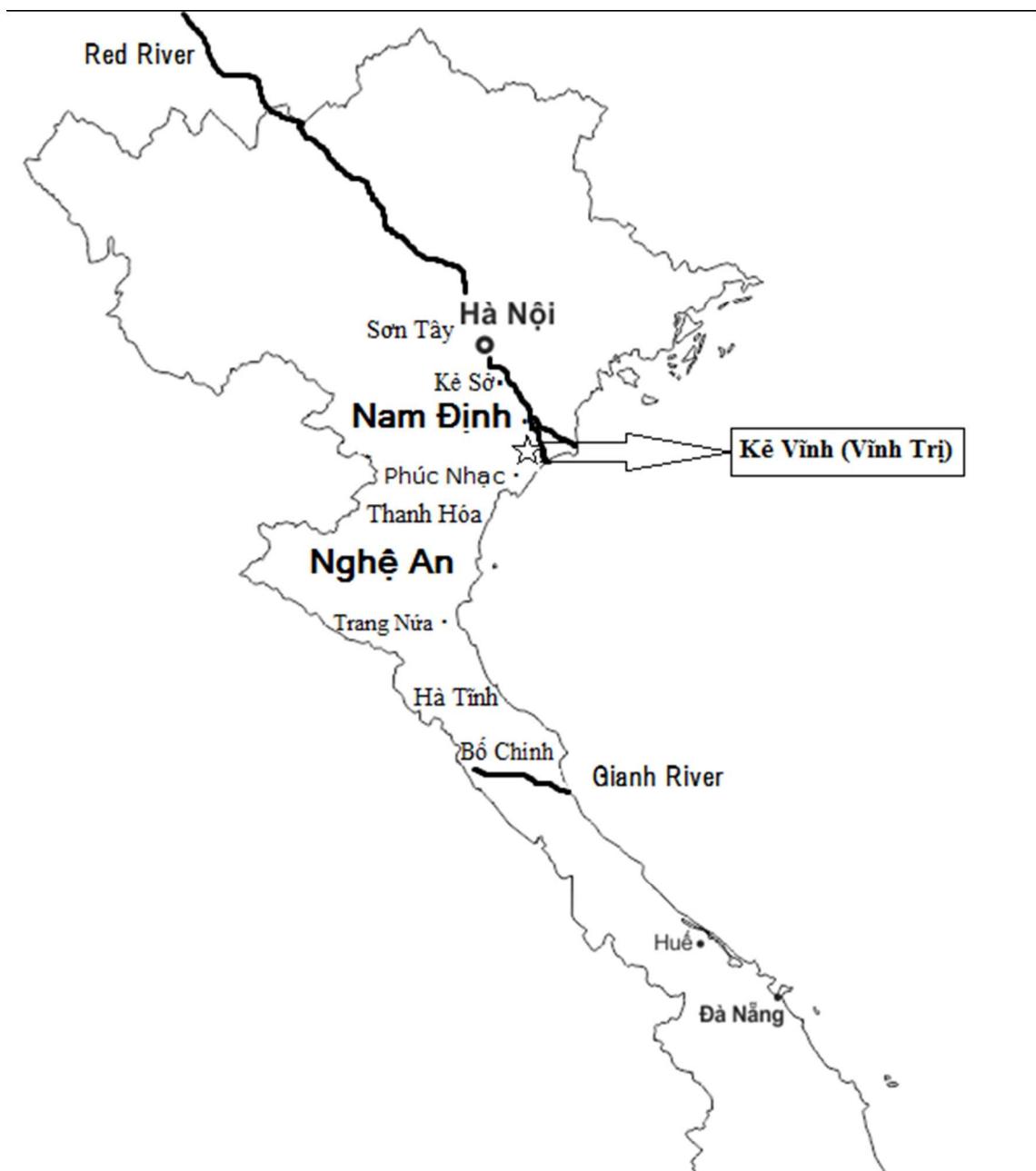
牧司教が居住したナムディン Nam Định 地方のケーヴィン Kế Vinh ことヴィンチ VĨnh Trị は代表的なクレティアンテである。ここは住民のほとんどがキリスト教徒で占められる「純粋クレティアンテ chrétienté pure」であった<sup>3</sup>。厳しい弾圧が行われない通常においてはこのヴィンチにコレージュとセミネールがともに置かれた。

これとは別に、MEPには東アジア・東南アジア全域における現地人教育を統轄する「コレージュ・ジェネラル Collège Général」も存在した。18世紀前半にシャムのアユタヤに設置され隆盛を極めたが、同世紀後半のビルマ軍侵攻にともなうアユタヤ朝の崩壊によって閉鎖を余儀なくされた。その後は19世紀後半にマレー半島に面するペナン島に再び開設された。コレージュ・ジェネラルにはそれぞれの出身地において迫害を逃れた留学生らがヨーロッパ人宣教師の庇護を受け、帰国後に聖職者として活躍することを夢見て日々勉学に励んだ。歴史的にみると、コレージュ・ジェネラルは MEP の各布教先において弾圧が激化した場合の避難所としての機能を果たした<sup>4</sup>。

---

<sup>3</sup> これに対して非信者との混住からなる「混合クレティアンテ chrétienté mixte」がある。代牧区内のクレティアンテのほとんどはこの混合クレティアンテであり、純粋クレティアンテはむしろ少数であった。詳細は牧野前掲論文を参照。

<sup>4</sup> 阮朝の明命帝による弾圧以降、ペナン島の総コレージュはベトナムの各宣教団にとって特に重要な派遣留学先であり避難先となった。1833年、コーチシナ代牧区司教のタベル Taberd はペナン島で現地人聖職者を養成する方針を早くも明らかにしている(*Annales de la Propagation de la Foi* (『信仰普及協会年報』以下 APF と略) Tome 7. pp.536-537)。1839年、クエノ Cuénot 神父も受け持ちの学生らの教育を継続させるために各々の進度にあわせてコレージュ・ジェネラルへ派遣することを報告している (AME 696 p. 542)。



西トンキン代牧区の全体図  
紅河 Red River とザイン川 Gianh River に挟まれた地域である

## 2. 西トンキン代牧区におけるコレージュとセミネール

ここでは西トンキン代牧区のコレージュとセミネールについて上記のコレージュ・ジエネラルの運営が中断していた時期、裏を返せば、ベトナムにおいて布教環境が比較的安定し

ていた 18 世紀後半から 19 世紀初頭の状況を時代順に概観してみる。

### 【黎朝鄭氏政権（1532-1789 年）の時代】

18 世紀をとおして MEP の西トンキン代牧区における布教活動を調査したアラン・フォレストによると<sup>5</sup>、西トンキン代牧区でコレージュの設立が確認されるのは 1683 年、代牧区南部のゲアン Nghê An 地方のクレティアンテであるケドン Ké Đông での報告事例を嚆矢とする<sup>6</sup>。その後もナムディンとゲアンでそれぞれに細々と断続的に運営がなされたが、軌道に乗ることはなく、ほとんどはアユタヤのコレージュ・ジェネラルでの教育に委ねられていた。

大きな動きが出てきたのは 18 世紀後半になってからである。1758 年にゲアンを預かる宣教師サヴァリ Savary の下で 9 歳から 12 歳の子どもたち約 30 人に向けてラテン語教育を施すコレージュが始動した。続く 1766 年、サヴァリとともにこのコレージュに長く勤めていたレイデレ Reydellet が、ヴィンチの代牧司教ネエ Néez の下へ戻ると、そこに新たなコレージュを建設した。これがサンピエール Saint-Pierre 校である。ここでは宣教師ブリカール Bricart の下で 42~43 名の生徒を受け入れることになり、これとは別に神学を学ぶカテキスタ catéchist (要理教師) も 15 人ほどを受け入れた<sup>7</sup>。

このサンピエール校の二つのクラスのうち、第一のクラスはブリカール自身が受け持つ比較的進度の早いクラスである。この第一のクラスの生徒たちはラテン語を既に少々話し、耳で聞いて理解もでき、なんとか用が足せるレベルであった。第二のクラスはベトナム人の 2 名の助教師 sous-maitres が教鞭をとり、基礎的事項を学ばせるクラスである。授業はラテン語とキリスト教教義の基礎から成っており、ベトナム語の読み書きとラテン語の文法規則を学んだ。ラテン語の単語については暗記が必須で、3 年以内には辞書を使わずとも何とか理解し、ローマカトリック式の儀礼を執行し讃美歌も歌えるようになることが目標とされた<sup>8</sup>。

サンピエール校は 1773 年、鄭氏政権下で起こった弾圧をうけて他の関連施設ともども破壊を被ったが、1778 年には早くも再建された<sup>9</sup>。1784 年時点の記録では、宣教師セラール Sérard が 15 人のカテキスタに神学を教えており、そのなかには前途有望な者もいたという。この 15 人は 3 年前から第一のクラスに在籍しており、第二のクラスには 40 人の生徒が 1 年前から授業を受け始めていたという。第二のクラスの主な世話役はかつてコレ

<sup>5</sup> Alain Forest, *Les missionnaires français au Tonkin et au Siam XVIIe-XVIIIe siècles: Analyse comparée d'un relatif succès et d'un total échec*, Livre II Histoire du Tonkin., L'Harmattan, 1998, Paris.

<sup>6</sup> Forest, *op.cit.*, p160. ケドンは正確にはハティン Hà Tĩnh 地方であるが、当時の MEP 宣教師にはゲアンに含まれると認識されていた。

<sup>7</sup> Forest, *op.cit.*, pp.203-204.

<sup>8</sup> AME 690 p. 464.

<sup>9</sup> Forest, *op.cit.*, Livre III pp.124-125.

ージュ・ジェネラルから戻ってきた留学生の 2 名であったとのことなので<sup>10</sup>、恐らくは前段で述べた助教師のことを指しているのであろう。ちなみに、この時期、セミネールはまだ開校しておらず、この第一のクラスがそれに相当するものと考えられる。

### 【西山朝（1778-1802 年）の時代】

さらに時代が下って、西山朝下 1795 年頃に記された書簡報告によると、サンピエール校には 50 人ほどの生徒があり、ときには 60 人から 70 人になることもあったという。ヨーロッパ人の宣教師が責任者を務め、ラテン語に精通するカテキスト数名が補助者となって運営していること、生徒は通常 18 歳から 19 歳でようやく入学を許されること、彼らはそれぞれの教区司祭から選抜された者で初步的なラテン語の読み書きは既に終えているのが前提であったこと等がさらに記される<sup>11</sup>。また同時期にはゲアン地方のチャンヌア Trang Núa のクレティアンテにもコレージュが置かれており、1797 年時点において 30 人以上の学生がラテン語の学習に勤しんでいた<sup>12</sup>。代牧区内の各コレージュでの教育活動は西山朝の支配下でも継続していたことがわかる。

他方、セミネールについては、その教育の中核を占める神学の受講クラスが正式に始まったのが 1792 年である。当時の代牧司教ロンジエ Longer によると、当初は 20 人ほどの「若く出来の良い」学生たちで構成されていた<sup>13</sup>。1795 年の記録でも、「信心深く、品行に優れた熱意ある 19 人の学生が在籍し、36 歳から 40 歳に達した学生のみに入学の許可を与えていた」とある。当時のヨーロッパ人宣教師の間では、「現地人はヨーロッパ人よりも人格形成が遅く、より長い間の修練が必要である」との共通認識があり(詳細は後述)、彼らヨーロッパ人宣教師こそが教育の責任を率先して担わねばならないとの自覚が持たれていた<sup>14</sup>。

### 【阮朝嘉隆帝（1802-1820 年）と明命帝治世前半（1820-1830 年）の時代】

19 世紀初頭、西山朝を滅ぼした阮福映が嘉隆帝(在位 1802-1820)として阮朝を開くと、戦乱を逃れてハノイ南方のケソ Kê Sò のクレティアンテに移転していたサンピエール校は、代牧区の中心地であるナムディンのヴィンチに再び設置された。そこでは宣教師テシエ Tessier とルロワ Leroy が司祭叙階前の学生の指導に当たった<sup>15</sup>。

嘉隆帝に続く第 2 代皇帝の明命帝(在位 1820-1841)の治世前半にあたる 1827 年の時点でも代牧区内にはセミネールが一校、コレージュが二校あるとの報告が残る<sup>16</sup>。1828 年にベトナム中部のコーチシナから入り、トンキンへと向かった宣教師プードルー Poudreux の

<sup>10</sup> AME 700 pp. 1182-1183.

<sup>11</sup> AME 692 p. 357.

<sup>12</sup> AME 692 p. 766.

<sup>13</sup> AME 692 p. 441.

<sup>14</sup> AME 692 p. 357.

<sup>15</sup> AME 696 p. 326.

<sup>16</sup> APF T4. p.303.

書簡には「当地にはコレージュが二つある。それぞれがサンジャック Saint-Jacques、サンピエールと呼ばれており、サンジャックには 40 人の学生がベトナム人司祭の下でラテン語を学んでいる。しかし、衣食住にかなり困窮した状態である」との記載がある<sup>17</sup>。

1829 年 7 月 10 日付のアヴァール Havard 司教の書簡にはヴィンチが西トンキン代牧区の中心であり、住民の全員がキリスト教徒であること、「大コレージュ le Grand Collège」があり、15~20 年前からセミネールも置かれているとの言及がなされる<sup>18</sup>。この大コレージュがサンピエール校を指すのは間違いない。他方ハティンに置かれていたのがサンジャック校である。

翌 1830 年 9 月の宣教師マレット Marette の報告ではサンピエール校には 60 人、サンジャック校には 40 人の学生がおり、いずれもラテン語の学習に専念し、通常はラテン語で会話することが奨励されていた。サンピエール校では助教師 4 名（叙階前の神学生 1 名とラテン語に習熟したカテキスタ 3 名）が教鞭をとっており、アヴァール司教の下で神学生も 20 人を抱えていたという<sup>19</sup>。

### 3. コレージュ探訪

ここでは西トンキン代牧区のコレージュで施されていた教育の中身について検討したい。実はそのための格好の史料が存在する。上記のサンジャック校に関する書簡報告である。このコレージュはコーチシナ代牧区との境界に近いハティン地方の南辺、ボーチン Bó Chinh のクレティアンテに置かれていた。

19 世紀初頭のロンジェ代牧司教の指導体制下においては、宣教師ゲラール Guérard が校長として監督責任を負い、ベトナム人の司祭が学生たちの教育に当たった。以下は 1807 年にゲラールが MEP マカオ管財所長のルトンダル Letondal 神父に宛てた書簡の一部抜粋である<sup>20</sup>。少々長いが、ベトナムの従来のキリスト教史研究において恐らくは言及されたことのない史料である。記述も具体的な内容を多々含んでおり興味深い。それではコレージュ探訪の扉を開けてみよう。

ルトンダル師、そして親愛なる同僚たちへ

何もないサンジャックのコレージュで私たちが実践している方法を以下にお伝えしましょう。

雄鶲が最初の声を上げる朝の 4 時ごろ、「ベネディカムス・ドミノ（主をたたえよ）」の号令で目を覚ますと、生徒たちはすぐさまそれに応答し、起床しなければなりません。

<sup>17</sup> APF T5. p.309.

<sup>18</sup> APF T5. p.316. note

<sup>19</sup> APF T6. pp.84-85.

<sup>20</sup> AME 701 pp. 691-694.

そして、聖歌用あるいは食事用の衣装を身に着け集合し、二列となつて隣接する教会に向かいます。

アンジェラス（お告げの祈り）の後、聖母に捧げるささやかな祈りを暗唱あるいは唱和します（小聖務日課）。はつきりと声に出す祈りです。そのあと、45分ほど瞑想してからミサに耳を傾けます。その間はウェニ・クレアトル *veni creator*（グレゴリオ聖歌「來りたまえ、創造主よ」）が歌われ、四旬節においてはパルケ・ドミネ *parce domine* がミゼレーレ *miserere* の曲とともに合唱されます。追悼ミサでは、ミゼレーレは「エレヴァツィオ（奉挙）elevation」か「タントゥム・エルゴ（大いなる秘跡）*tantum ergo*」、あるいは「ああ救いの生贊よ *o salutaris hostia*」、聖体拝領では「パニス・アンジェリクス *panis angelicus*」を歌います。死者へのミサではエレヴァツィオで頌歌「ああ死者の聖なる救いの生贊よ *o salutaris hostia sacra des morts*」を歌い、聖体拝領では何も歌いません。ミサの最後には、このコレージュの守護聖人である聖ヤコブの先唱句 *l'antienne de St. Jacques* を歌います。生徒監 *prefet* が祈祷し、「ラウダテ・ドミヌム・オムネス・ジェンテス *laudate dominum omnes gentes* すべての人よ、主を褒め称えよ」で異教徒の改宗を願い唱えます。

この後に生徒たちは共同の礼拝堂から出て、着替えてから、朝食の時間まで自分たちの課目を暗記します。朝食後はすぐに教室に入ります。教師は課題を暗唱させ、必要な説明を与え、翻訳をさせて、一つの主題あるいは解釈を書かせて提出させます。教師は辞書の役割を担っています。というのも、不幸なことに、ここではヨーロッパで手に入るような辞書がないからです。最初に課題を終えた者は全員が終わるのを待つ間、好きなものを読んだり、書き写したりします。こうして、教師は全員に与えた課題等を添削します。

11時ごろになると、教室の外に出るよう合図が出されます。こうして、生徒たちは昼食の時間までラテン語で会話するよう促されます。というのも、他の言語で話すことを許されていないからです。出来の良し悪しは関係ありません。ただ、ベトナム語が一言でも出てしまったら、食器の小鉢を洗わないといけません。会話は、文法規則、すなわち語尾変化と活用、授業で説明したことに乗つかって進められます。錫製のメダルを持っている者は希望者からの質問を受け付けます。その場ですぐに答えなければ、そのメダルは取り上げられます。同じ方法で他の者からメダルを獲得しない限り、小鉢洗いを続けなければなりません。このちょっとしたゲームは生徒たちにとって気晴らしになると同時に、競争心を面白いようにかきたてるため、ラテン語のよい練習となります。

最初の合図で、全員が教会に向かいます。個々に試験を受け、ベトナム語で一章句を読みます。そのあとはすぐに昼食です。食前の祈りはラテン語で立ったまま唱えます。パリの外国宣教会本部と同じです。晩も朝も同様ですが、断食期間中も、朝を除いて、昼食も夕食の時さえも祈ります。まずは、聖書の5つの節がラテン語で読まれ、全員がナプキンを広げずにそれを聞きます。それから、その日の守護聖人の生涯が読み上げら

れ、ベトナム語の書物も読み聞かされます。食事の後には同様に立ち上がってラテン語で感謝の言葉を言い合います。

昼食後は全員が一時間から一時間半ほどの午睡を取ります。朝と同じように教会に向かうための合図がなされ、合唱用の衣服に着替え、小聖務日課として晩禱と終禱を唱和します。それから勉学に取りかかります。朝と同じように一つの主題あるいは解釈を翻訳作成するのですが、時間はあまり長く取れないため、より短いものとなります。5時ごろ、勉学から離れて、夕食時まで手仕事に出かけます。生徒たちはグループごとにわけられ、そこから生徒監も選び出されます。仕事はグループ単位で分配され、互いに激励し合って、なるべく早くに済ませられるようにします。夕食後は翌朝に勉強し読み上げないといけない事柄を暗記します。全員一緒に食堂で勉強しますが、朝はそれぞれの寝室で勉強します。それについては後ほど述べます。

9時ごろ、祈りの合図が出されます。各自が合唱服を身に着けます（トンキンではゆったりした衣服です）。食堂に集合し、そこから朝と同じように進みます。まずは、「ウエニ・サンクテ・スピリトゥス verni sancte spiritus 聖靈來りたまえ」を唱え、その日の過ちを自省し、告白の祈りに先立つ痛悔の祈りを行います。それから聖母に捧げる小聖務日課の「matines et laudes」を唱えますが、朝方声にして唱えた祈りに代わるものです。そのあとは聖ヤコブの先唱句を歌い、それから床に就きます。

すべての行動に関してコレージュの生徒監を務める司祭に加えて他に二人の教師が同伴します。さきほど述べたように、生徒たちは仕事によって各グループに分配されるほか、品行によっても分けられます。すなわち、5人あたりに1人が指名を受け、それぞれのふるまいを監督し、生徒監に報告します。最も賢く、よき見本となるような人物がこの職務に選ばれます。選ばれた人物はあらゆることに答える責任があり、生徒監にそれを通告せずとも全てを知っていないといけません。かりに知らなかつたとすれば、それは怠慢となります。この方法はかなりうまくいっています。5つある共同寝室にそれぞれ割り当てられ、つまるところ、5人の生徒とその監督者1人の計6人で構成されます。

共同寝室はつねに開放されており、2人の教師がそれぞれ両端に、1人が中央に配置されます。各寝室は寝台を隔てる隙間しかなく、寝台はベトナム風のイグサで編んだゴザでしつらえてあります。生徒たちは対面でコミュニケーションをとることはできません。というのも、寝台は両端に分かれているからです。入口が隅っこにあり、もう片方は窓に面しています。もしこれほどに貧しくなかつたなら、もっと広くて余裕のあるところで過ごさせてあげたいのですが、「無い袖は振れぬ deficiente pecu - deficit omne, nia」とはよく言ったものです。

水曜日は休暇の日です。この日は全く勉強をしない日となります。生徒たちは料理用の木材を探しに山に行くか、季節の移り変わりや必要に応じて何らかの仕事をします。すべては彼ら自身です。小物細工に大工仕事、左官などもやってのけます。ただ、

生活の糧となる畠仕事については生徒にあまり時間を取らせるわけにはいかないので、3~4人の男性にやってもらっています。生徒たちは一日2回、交代で料理をしています。また、ここから離れた村で4人の老女を扶養しており、彼女たちに衣服を縫ってもらっています。仕事は結構な量です。コレージュ内への立ち入りは禁止ですが、庭の隅に一軒家があり、そこで来客を迎えていました。キリスト教徒がミサに出席するための教会と生徒たちのいる教会とは木柵で分かたれています。この柵はゴザに似たイグサ布に覆われており、司祭が祭壇に上がるときだけ上げて、ミサが終わるとすぐに下げています。接触を求める信者がいれば、柵越に聖体拝領を行います。

コレージュの裏側の小高い丘に美しい十字架を立てています。ときどきそこまで行進をしますが、まったく華美なことはなく、カプチン会の修道士のような簡素さです。

まあこれがあなたの求めに応じて応えられるすべてです。もっとお知りになりたいのであればおっしゃってください。

最大限の敬意と誠実さをこめて。親愛なる同僚よ。

1807年5月11日

ゲラール

コレージュ内ではラテン語の習得を第一の目的として、生徒たちが寝食をともにして規則正しい生活を送っていた様子がわかる。彼らはラテン語力の向上と日々の暮らしの品行を保つため、相互に励まし、見張り合った。彼らの生活の糧となる畠もあり、それを耕作する男性の使用人が3~4名いた。生徒たちの縫い物を依頼している老女ら4名もコレージュの近隣の村で雇用していたようである。コレージュに附属する教会は信者たちの通う教会とは別棟であり、世俗との交わりは絶たれていた。

このゲラールの報告からは、当地のコレージュがあたかも厳格なヨーロッパの石造りの中世的なそれであるかのようなイメージをしてしまうが、実際のところはどうだったのだろう。約20年後の1828年6月、この地にいた宣教師マッソン Masson は次のような証言を残している。

現地の役人は見て見ぬふりをしてくれています。文字を学ぶために集まることは法律で禁じられていません。かりに集会をしたところで騒ぎにはなりません。生徒たちはまったく外に出ませんし、建物はヨーロッパのように全く大きくありません。粗末な掘立小屋で、高い竹垣に囲まれていますので、近くを何度も通ったとしても、そこにコレージュがあるとは誰も気がつきません<sup>21</sup>。

禁教下でもあり現地当局をなるべく刺激しないためにも、コレージュの建物を必要以上の規模にはしなかったものと考えられる。もちろん、ヴィンチのサンピエール校のように、

---

<sup>21</sup> APF. T4. p.313.

コレージュ側でも学生による交代制での夜間警備などは実施されていたかとは思われる<sup>22</sup>。

なお、ゲラール神父による上掲書簡中にみられる生徒間で行われたラテン語の知識を競うゲームに関してはラテン語教育の一環としてその後も普及したようである。1824年、アヴァール司教はマカオ宛の書簡のなかで、同司教の監督するサンピエール校において優秀な学生たちに褒賞として与えているメダルが不足しており、新たなメダルを発送してほしいとの依頼をしている<sup>23</sup>。

#### 4. 現地教育へのこだわりとその要因

西トンキン代牧区の MEP 宣教師たちは現地人聖職者の養成において、なぜにかくも現地での教育に拘泥したのであろうか。いくつかの要因を以下に提示してみたい。

まず、一つには言語という文化的要因が考えられる。かつてアユタヤのコレージュ・ジェネラルから帰ってきた留学生らは彼の地でのラテン語学習に傾注したあまり、母語であるベトナム語を疎かにしてしまい、母国の生活様式さえも軽んじるようになったという。彼らはベトナム各地の村々で布教に従事すべきときに自国語の読み書きを忘れてしまっていたうえに、基本的な礼儀作法も知らないことから、布教先ではたちまち侮蔑の対象となってしまった。こうした苦い経験を背景に、レイデレがヴィンチで新たに建設したサンピエール校においてはラテン語とともに母国語の学習にも力を注がせる方針を取った<sup>24</sup>。布教活動の根幹をなす言語と社会慣習の両面において、現地での教育がやはり必須であるとの共通認識が代牧区の MEP 指導層においても浸透したとみられる。

そもそも 1659 年に発令された教皇庁からの勅書に従えば、新たに設置された代牧区においては、ラテン語教育に関する特別な規定が適用されていた。ラテン語を十分に知らなくとも大声で聖書を読み上げ、祈りを唱えることができるのならば、現地人を司祭に叙階できるという権限が代牧司教には付加されていたのである<sup>25</sup>。

いわゆる漢字文化圏に属する前近代のベトナムにおいて広く用いられていた書記言語は漢字であり、漢字から派生した民族文字の「チュノム Chữ Nôm (字喃)」である。この二種類の文字の学習は公私両面において日常生活と直結するため、キリスト者のコミュニティにおいてもラテン語の学習より一層の緊急を要した。聖職者や信者の所有する書物も宗教書を含めて全てが漢字かチュノムで書かれていた。したがって、代牧区に奉仕し、聖職を目指す若者に漢字とチュノムの読み書きを教え込むことは最優先の課題であった<sup>26</sup>。

<sup>22</sup> APF. T3. p.431.

<sup>23</sup> AME 701 p. 1021.

<sup>24</sup> Forest, *op.cit.*, III, pp.141-142.

<sup>25</sup> André Marillier, *Nos pères dans la foi: notes sur le clergé catholique du Tonkin de 1666 à 1765*, Textes, Églises d'Asie, 1995, Paris, p.32.

<sup>26</sup> 1797 年、宣教師セラールはチャンヌアのコレージュで 7~8 年前からラテン語のクラスとトンキン文字のクラスを担当した現地人司祭ヒエップ Hiep に対して高い評価を与えていた。ヒエップのクラスは 60 人の生徒を抱えてヨーロッパ人に勝るとも劣らないほど規則正しく運営されていたという (AME 692 pp. 781-782)。

大局的にみると、ラテン語の学習は最終的に司祭への聖別叙階に到達する少数のエリート学生にしか役に立たないが、漢字とチュノムは草の根レベルの布教活動に求められる最低限の知識であり、死活問題であった<sup>27</sup>。ヨーロッパからベトナムに渡ってきた宣教師たちもまずは基礎的な漢字とチュノムの読み書きに取り組み、配下のカテキスタや現地人司祭との意思伝達を図った<sup>28</sup>。コレージュにおけるラテン語学習の厳しさは繰り返し強調されてきたが、実のところ、それは漢字とチュノムの学習を経た前提において成り立つ目標であった。

つぎに、二つめの要因として費用の問題を挙げたい。西トンキン代牧区からアユタヤのコレージュ・ジェネラルへ留学生を派遣する事業は大変な出費を要し、代牧区の財政を圧迫するものであった。宣教師レイデレによると、1764年に4人の留学生をマカオ経由でコレージュ・ジェネラルへ派遣した場合の費用はヨーロッパ人宣教師一人分の旅費を超えており、トンキンで6人の学生を5年間養える額に相当したという。優秀に思えた学生をアユタヤに派遣しても、上で述べたように出来の悪い学生になって帰ってくる恐れもある。一人の留学生を仕立てる費用があれば、現地布教に役立つ10人の学生をトンキンで育てられるとの見解をレイデレは提示している<sup>29</sup>。

1794年のロンジェ司教によるマカオ管財所宛の書簡には、西トンキン代牧区の逼迫した財政状況が語られている。代牧区全体として300リガチュール ligatures の基金を保有するが、約150ピアストル piastres をセミネールの年間の運営費に充てていた。前年のコレージュの運営費は1,046リガチュールにも上り、43サーぺク sapecs の2つ分、すなわち500ピアストル相当にあたる。これで60人以上の学生を養わないとならない。ゲアンでは618リガチュール、すなわち300ピアストル相当の額で50人以上の学生を養っており、いざれも財政上の危機に陥っていることが力説されている<sup>30</sup>。この時期の西トンキン代牧区では海外へ学生を頻繁に送り出す余裕はなかったようである。

現地政権からの目立った弾圧もなく比較的安定していた布教環境下にあった阮朝の嘉隆期から明命期前半においても代牧区の懐具合は苦しいままであった。1817年、宣教師エイオ Eytot は財政事情の逼迫を受けてセミネールを「大コレージュ」(前掲)に統合し、ヴィンチにおいて両方の面倒をみることになった。その結果、150人以上の若い学生を扶養せねば

<sup>27</sup> Motonori Makino, *The Vietnamese Written Languages and European Missionaries: From the Society of Jesus to the Societe des Missions Etrangeres de Paris, Beyond Borders: A Global Perspective of Jesuit MissionHistory*, Edited by Shinzo Kawamura and Cyril Veliath, Sophia University Press, 2009.

<sup>28</sup> Marillier, *op.cit.*, Textes, pp.237-238.

<sup>29</sup> Marillier, *op.cit.*, Textes, pp.245-246.

<sup>30</sup> AME 701 p. 61. 通貨単位についてはフランス植民地期においておおよそ以下の基準が適用されている。60 サーぺクが 1 ティエン tien、10 ティエンが 1 リガチュールである。さらに、100 リガチュールが 15 ピアストルであり、これは銀 1 バールに相当する。ベトナム史における度量衡については、関本紀子『度量衡とベトナムの植民地社会』(創土社、2018年)が詳しい。

ならなくなり、出費が膨大となったこと、将来の司祭のために用意する祭服や器具、聖杯、聖体器、聖油箱、上祭服なども用意せねばならないことから悲嘆に暮れていた<sup>31</sup>。エイオは1826年にも同様の報告をパリの MEP 本部へ上げている。統合後の大コレージュには 27人の神学生と 59人のラテン語学生があり、後者には 5人の教師がついていた。そのほか 28人の使用人、すなわち司祭の仕事を補助するカテキスタや若者たちも数多くいた。これらの人々を養うのは、特に米価が高く人々が大変貧しい暮らしを強いられる悲惨なこの時期において多大な財政負担となっていた<sup>32</sup>。

1831年のアヴァール司教の報告でも財政事情の悪化がみてとれる。代牧区内の二つのコレージュの存立が危機にさらされているが、特に 4~5年前から支払能力を超える出費が続いているのが原因であるという。大コレージュだけで米の購入価格が 2,000 リガチュールに上っていた<sup>33</sup>。さきほど言及した 30 年前のロンジェ司教の時代に比べても、急激な物価高に悩まされていることがわかる。アヴァール司教が監督する大コレージュには 60人のラテン語学生がいて、5 クラスに編成されていたが、各小教区に散らばる現地人司祭のもとでもコレージュへの入学を熱望する学生が数多くいた。司教は、もし 200人の学生を養える手段があれば、一ヶ月でその人数は集まるであろうと述べるが<sup>34</sup>、このように逼迫した財政状況下では、目の前のコレージュを維持するのが手一杯で、外に触手を伸ばす余裕はなかつたであろう。

最後に、三つめの要因として、代牧区内におけるヨーロッパ人聖職者とベトナム人聖職者との間の序列の問題を指摘しておきたい。本稿冒頭でも述べたように、現地人司祭の養成こそが MEP の海外布教活動における最終目標であったが、それはヨーロッパ人宣教師の監督下においてこそ実現可能であるとの考え方方に根付くものであった。ベトナムではフランス植民地期を含むそれ以前の時代において、フランス人宣教師の間にはベトナム人が精神面や知識・教養面でヨーロッパ人よりは成熟が遅れているため聖職者となるための修練期間が長くなることはやむをえないとの認識や<sup>35</sup>、ベトナム人司教のもとで教会を自立させるのは時期尚早であるとの認識が共通して持たれていた<sup>36</sup>。つまりところ、ベトナム人の聖職志願者はヨーロッパ人宣教師の手元で常にきちんと監督してこそはじめて養成が可能であると考えられていた。

---

<sup>31</sup> AME 694 p. 276.

<sup>32</sup> APF. T3. P.414.

<sup>33</sup> APF. T6. pp.402-403.

<sup>34</sup> APF. T6. p.405.

<sup>35</sup> 註 14 参照。

<sup>36</sup> ベトナム人司教が歴史上最初に誕生したのはフランスの植民地統治が始まってやがて半世紀が経とうとする 1933 年になってからのことである。ヨーロッパ人と現地人とにおける聖職者間の序列はなかなかに根の深い問題であった。ベトナム人による教会の自立はフランス植民地期が終焉を迎える頃によく実現した。詳しくは、Charles Keith, *Catholic Vietnam, A Church from Empire to Nation*. University of California Press, 2012 を参照。

もっともベトナムでは宣教活動の最初からベトナム人とヨーロッパ人との間での序列が定められていたわけではない。1670年にコーチシナ初代代牧司教のピエール・ランベール・ド・ラ・モット Pierre Lambert de la Motte が主宰した司教会議 synode では教会内のヒエラルキーが一応定められはしたもの、一般信者の上に位置するのはカテキスタ、司祭、代牧司教のみであり、そこに入種や国籍による区別の概念はみられない。フランス人の宣教師は助言者や教育者としての役割を期待されるのみであり、フランス人がベトナム人に職務権限のうえで優越するとの記載はみられない<sup>37</sup>。両者の間の序列は時代が下るにつれて次第に明確化したのである。とくに、18世紀末のロンジェ司教による分業化と階層化を伴う改革が実施されてからはその傾向が強まったようである<sup>38</sup>。

ペナンにおけるコレージュ・ジェネラルの開校前の話であるが、19世紀の初め頃、MEP ではパリの本部やマカオの管財所にいる宣教師達の間でアユタヤ以来となるコレージュ・ジェネラルの再興が盛んに議論され始めた。しかし、西トンキン代牧区在住の宣教師たちはそれに対しておしなべて反対の意を示した。彼らは「現地での教育こそが肝要なのであり、現地人の聖職者は未熟で軽佻浮薄なので、ヨーロッパ人の統治が継続的に必要である」との決まり文句を繰り返し表明するのであった<sup>39</sup>。以下は少し時代が下がるが 1828年のマッソン神父の証言である。

一般に現地人司祭たちは学識において少なからず欠けた部分があります。ラテン語の字面しか読めない者もあり、神学の授業を通常 4 年もの間受けるのですが、倫理学しか身につきません。教義に関してはカテキスタになる前に十分に学んでいます。それに、宗論においてはそれを全く援用しません。この才能は神の恩寵を以てしても全く必要とされないし、彼らの誇るべき特性ともならないでしょう。こうした国に異端の入り込む余地は全くないことは断言できます。神学の勉強が認められるのはカテキスタとしての実務を数年経てからで、30 歳頃になってからです。かような処置には驚かれるかもしれません、必要なのです。わがトンキン人の知性は 20 歳ごろになってようやく発達し始めます。そのためラテン語もその頃になってから教え始めます。ラテン語と彼らの話す言語との間には全く関係性がないので、その学習にはかなり苦労します<sup>40</sup>。

<sup>37</sup> Marillier, *op.cit.*, Textes, p.39.

<sup>38</sup> ロンジェ司教による改革についての詳細は、拙稿「西山政権下におけるパリ外国宣教会西トンキン代牧区：1788～1802」（『東洋文化研究』8号、学習院大学東洋文化研究所、2006年）を参照。なお、同司教は 1796 年の書簡のなかで、ドミニコ会、フランシスコ会、イエズス会など他の修道会のこれまでの対応、あるいはフランシスコ・ザビエルの手紙を引用し、現地人司教の可能性について反対の姿勢を明らかにしている。アジア人の性格について一般に臆病で卑屈であると述べている (AME 701 pp. 180-181)。

<sup>39</sup> この類の証言は枚挙に暇がない。AME 693 pp. 939-940., AME 694 pp. 95-96., p. 178., AME 696 p. 582., AME 701 pp. 633-634., AME 701 p. 734, pp. 798-799., APF. T6. p.371.

<sup>40</sup> APF. T4. pp.324-325.

マッソン神父はフランス人とベトナム人との間を問わず人望があり、布教先でも信者・非信者の双方に慕われていたと同僚の間でも好意的に評価された人物である<sup>41</sup>。ベトナム人の性質や社会文化全般に対して決して否定的印象を抱いていたわけではない。上記は彼の周りにいたベトナム人司祭の現状を彼なりに客観的に論評したものである。

聖職を目指す学生たちは確かにコレージュそしてセミネールで机上の学問を積み、理想とする教区付司祭への階梯を上ったが、他方で禁教下の弾圧をともなう目まぐるしい変化のただなかにあった現地の社会情勢に適応すべく実務を通しての経験も豊富に積む必要があった。MEPによる宣教活動の開始からやがて200年が経とうとしていたこの時期、西トンキン代牧区では過去の経験を十分にふまえたうえで、学生たちを可能な限り自らの手元で養成していく方針が固まっていたものと思われる。

### むすびにかえて

MEPの西トンキン代牧区は現地人聖職者なかんずく現地人の教区付司祭の養成という点では18世紀末頃までには設立以来の目的に到達していたといえよう。その具体的な養成手段としてコレージュとセミネールという教育機関が存在し、それれにおいてラテン語と神学を中心とした専門教育の展開があった。

17世紀後半の宣教最初期、あるいは19世紀半ば以降の弾圧激化の一時期にはアユタヤとペナンのコレージュ・ジェネラルでの留学が代替したが、それ以外のほとんどの時期をとおして西トンキン代牧区では現地教育が優先された。なかでもナムディン地方（ヴィンチ）とゲアン地方が二大拠点となった。

聖職者養成の徹底した現地化志向の背景には、言語の問題、費用の問題、階層性の問題などの要因があるが、それらはMEPが現地社会の草の根レベルで布教活動を継続し発展させていくなかで、時の経過とともに経験則から導いた指針に基づくものであった。ベトナムにおいて元々は外来宗教であったカトリックが、18世紀末のトンキン（北ベトナム）に至っては既に在地の村落社会の営みの中にあり、しかと根を下ろしていたことを示す一つの証左となり得るものである。

しかし他方で、現地での教勢の拡大はバチカンあるいは本国フランスのカトリック教会からの人的・財政的支援とも不可分の因果関係にあるため、彼らの意向もまた無視できぬものであった。とりわけ、フランス政府とカトリック教会との関係が密になる19世紀半ば以後、「現地志向：ローカリズム」と「普遍化：カトリシズム＝グローバリズム」の二つのベクトルが強力に引き合うなかで、狭間におかれたベトナム人の聖職者・信者たちはその相剋に深く苦悩することとなるのである。

---

<sup>41</sup> APF. T6. pp.403-404.

## 参考文献

### 一次史料

パリ外国宣教会所蔵文書 Archives des Missions Etrangères de Paris (AME)  
『信仰普及協会年報』*Annales de la Propagation de la Foi (APF)*

### 二次資料

Alain Forest, *Les missionnaires français au Tonkin et au Siam XVIIe-XVIIIe siècles: Analyse comparée d'un relatif succès et d'un total échec, Livre II Histoire du Tonkin.*, L'Harmattan, 1998, Paris.

André Marillier, *Nos pères dans la foi: notes sur le clergé catholique du Tonkin de 1666 à 1765, Textes*, Églises d'Asie, 1995, Paris.

Motonori Makino, The Vietnamese Written Languages and European Missionaries: From the Society of Jesus to the Societe des Missions Etrangeres de Paris, *Beyond Borders: A Global Perspective of Jesuit Mission History*, Edited by Shinzo Kawamura and Cyril Veliath, Sophia University Press, 2009.

Motonori Makino, Native Priests in Christian Societies in the Northern Regions of Precolonial Vietnam: The Appearance of Glocal Elites?, *A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers in Southeast Asia*, Toyo Bunko Research Library 21, Edited by Masashi Hirosue, Toyo Bunko, 2020.

関本紀子『度量衡とベトナムの植民地社会』(創土社、2018年)

牧野元紀「西山政権下におけるパリ外国宣教会西トンキン代牧区：1788～1802」(『東洋文化研究』8号、学習院大学東洋文化研究所、2006年)

牧野元紀「ベトナム前近代史のなかのカトリック：信仰生活共同体クリエイアンテと信者のくらし」(『上智大学キリスト教文化研究所紀要』28号、上智大学キリスト教文化研究所、2010年)